



**島根県公立小中学校
事務職員研究会**

会長：吉賀孝則
(川本町立川本中学校)

編集：情報部

VOL.85 2026.3.3 (雑祭号)

発行責任者 坂井佳恵 (大田第二中学校)

島事研ホームページ
<http://shimajiken.com>



爽



【目次】

- ▶ 「人のつながり、
あたたかさのある学校に」
(出雲教育事務所長 梅木 喜嗣)
- ▶ 研究部コーナー
- ▶ 節目の春に、あらためて
- ▶ 中国地区学校事務研究大会 兼
島根県学校事務セミナー参加者の感想
- ▶ 学校紹介
- ▶ まんが「しまじいとけんくん」
- ▶ 編集後記



「人のつながり、あたたかさのある学校に」

出雲教育事務所長 梅木 喜嗣

令和7年11月、第55回島根県公立小中学校事務研究大会が出雲市で開催されました。本年度は、「学校事務職員として成長するための研究活動～『つかさどる』を意識した実践をとおして～」というテーマを掲げた第六次研究中期計画の4年目になります。そして、これまでの「基礎研究」を参考にし、各地域の研究組織や地域を超えた共同研究チーム等を活用した「応用研究」の1年目にあたります。研究大会で報告された応用研究発表とベネッセ教育総合研究所 庄子寛之主席研究員の講演をとおして、参加者が「事務をつかさどる」ことのイメージを掴み、理解を深めることができた貴重な時間となりました。

応用研究発表1では、ICTを効果的に利活用して、リアルタイムで現状把握や改善点を協議するという研究手法で取り組み、その結果、現状改善のみならず児童、教職員、地域に+αをもたらす成果を上げたことが発表されました。応用研究発表2では、専用の会計ソフト及び学校財務評価シートを作成し、学校財務という視点から市内各校の財務運営を再構築したこと、そして、事務職員だけでなく教育職員の意識の変革につながったという発表がありました。それぞれの課題に応じて共同研究チーム等を活用し、より深く発展的な研究が進められました。この研究スタイルは、学校事務機能の強化、教育環境の充実、事務職員の資質向上等、本県全体のレベルアップをもたらす素晴らしい取組であると実感しました。

さて、島根県では、他の地域に誇れる島根の良さや魅力である「人のつながり、あたたかさ」について、「誰もが、誰かの、たからもの。」をキーワードとして、県内外に発信しています。「さりげないけど、ほっとか

誰もが、誰かの、たからもの。

どんなに時代が変わっても、受け継いでいきたい
それは、人のつながり、あたたかさ

さりげないけど、ほっとかない
互いの顔が見える、人間味あふれる関わりが心地いい

今を見つめ、未来に想いをはせる
そんな心を、ときに優しくつつみ、ときにそっと背中を押す

大切に育ててきた“つながる力”は、
自分のサイズで、一生懸命生きる人を応援してくれる
未来への原動力



人が人のたからもの
誰もが誰かの応援団

いいけん、
島根県

ない」、「一生懸命生きる人を応援」するなどの姿は、事務職員の間だけでなく、教職員間においてもイメージし、共有し、つながり、あたたかさを築いていただきたいと考えています。わたしが学校勤務のとき、校内研究や学校行事など、目標に向かって教職員で一致団結して夢中になって取り組んだこと、そのときに味わった達成感や充実感は今でも覚えています。子どもが好き、学校が好き、子どもが学び成長する姿が喜びである、この思いの実現のために教職員のつながりをこれからも大切にしてもらいたいと思います。

今後も「事務をつかさどる」という視点から校内の教職員をつなぎ、巻き込みながら、島根の子どもたちの豊かな育ちの支援の実現に向けて力を発揮していただきますようお願いいたします。

研究部コーナー

応用研究(組織的な実践)へ



第六次研究中期計画も、今年度から後半に入りました。前半で会員の皆さまに積み上げていただいた「基礎研究(個の実践)」を土台とし、今年度からはそれを「応用研究(組織的な実践)」へと深化させることに取り組んでいます。

その動きの中で、今年度の研究大会では2本の応用研究発表を行っていただきました。どちらの発表も、個々の学校事務職員が日々の実践を通して培ってきた「気づき」や「知見」をチーム全体へ広げ、組織的な取組へと発展させたものでした。「個の力」が掛け合わせることが、とても大きな力になるということを、私たちに示してくれたと感じています。また、この活動を通じ、第六次研究中期計画で目指す全体像を、より明確な形で示してきたと思っています。

■ 私たちが研究活動を行う「目的」

あらためて、第六次研究中期計画では、研究活動の目的をシンプルに『成長するため』と設定しています。ここで言う『成長』とは、単なるスキルアップではありません。『自分自身を理解し、学校事務職員という職の理解を深めること。そして、それが身近な誰かのため、島根の教育のために役立つようになること』と捉えています。そして、この『成長』を実現するために必要なのが、『今の自分にできる実践』としています。

- 「基礎研究」：まず、個人の問いを深めることで、確かな『成長』の種を蒔く。
- 「応用研究」：仲間と共に挑み、より多くの知見や刺激を得ることで、『成長』をさらに加速させる。
- 「共有と波及」：発表を通じて結果を共有し、それを聞いた会員もまた実践を始めることで、組織全体が『成長』する。
- 「貢献」：それら全ての活動が、最終的に勤務する学校の教職員や、子どもたちの笑顔につながる。



「こんな風に、良い連鎖が生まれたいいな」。そんな願いを込めて、ここまで計画を進めてきました。

■ 「学校」という現場に立ち返る

ここでもう一つ、視点を変えてみましょう。これまで事務グループ等の活動により、地域単位での業務課題の解決は図られてきました。しかし、皆さんが日々過ごしている「学校そのものの課題」はどうでしょうか？

忘れてはならないのは、私たちは基本的に「学校」に勤務しているということです。学校の規模、子どもたちの状況、育まれてきた文化。同じ学校事務職員という職であっても、勤務する環境が違えば、課題として捉えるべきものは全く異なります。だからこそ、研究活動に関わることで、「学校の課題や、自分自身の課題解決をフォローする手段」として活用してほしいと考えます。

「今」必要ではないと思うことでも、「いつかどこかで」必要になる可能性があるのではないのでしょうか。

■ 「何を行いたいかが、方法を定める

「基礎研究」として、個人の力で目の前の課題解決に挑むアプローチ。「応用研究」として、解決したい課題に合わせて最適なチーム(組織)を編成し、挑むアプローチ。

時代の変化とともに、ICTをはじめ研究を進めるためのツールは飛躍的に増え、場所や時間の制約を超えてつながることも容易になりました。取組を行う方法には、これまでになかった幅と自由があります。

大事なものは、形式ではありません。「何を行いたい(目的)」によって「どのような方法を選ぶか(手段)」を、皆さんが主体的に決めることです。

■ ラスト2年、あなたの一歩が未来を変える

第六次研究中期計画は残り2年となりましたが「研究」という取組は続いていくと思います。

「研究」と身構えず、目の前の「やってみたいこと」を大切に、実践してほしいと考えます。皆さんのその一歩が、ご自身の『成長』につながり、やがては島根の教育を支える大きな力になると信じています。

残りの期間、皆さんと共にワクワクするような実践ができることを楽しみにしています。

「節目の春に、あらためて」

島根県教育庁学校企画課 人材育成スタッフ 大賀美 雅之

令和7年度も3月を迎え、節目の春が近づいてきました。年度末は、人事異動への対応や会計の締めなど、やるべきことが盛りだくさんで慌ただしい毎日をお過ごしのことと思います。日々を振り返りながら、新年度に向けて自分自身の立ち位置を見つめ直す時期です。限られた時間の中で、複雑な事務処理などを確実に進めていくことの大変さを実感する時期でもありますので、身体に気を付けながら、この節目を乗り越えていきましょう。

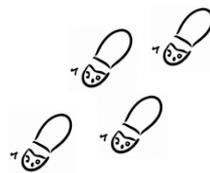
そのような忙しさに追われ、目の前の仕事をこなすことに手一杯になる中で、

「汝、なんのためにそこに在りや」

という言葉思い出されることがあります。自分は何のためにこの仕事に関わっているのか、どのように主体的に動くのかを改めて考えさせられます。忙しさの中では、目の前のごとを滞りなく進めることに意識が向きがちですが、その一つ一つを自分なりに意味づけしながら取り組むことも大切にしていきたいと思えます。

現在、私は教員志望者の増加につながる取組や広報などを担当しています。学校現場での勤務ではありませんが、将来の教育を担う人材と学校とをつなぐ役割の一端を担っていると感じています。言葉や表現一つにも責任を感じながら、教職の魅力や学校の姿をどのように伝えるか、数字や制度だけでなく、その先にある「人」を意識して仕事をしています。判断に迷うこともありますが、課内のスタッフと情報を共有し、助言をもらいながら取り組む中で多くの気づきを得ています。こうしたやり取りをとおして、自身の視野が広がり、日々の積み重ねが学びにつながっていることを実感しています。

新年度を迎えるにあたり、多くの方々に支えられていることに感謝しつつ、一つ一つの仕事にしっかりと向き合っていきたいと思えます。また、今の経験を力に変えながら、学校事務職員の皆さまと共に学びを重ね、穏やかで実りある一年にしていきたいと思えます。



令和7年度中国地区公立小中学校事務 研究大会 兼 第17回島根県学校事 務セミナー

期日:令和8年1月30日 会場:ビッグハート出雲

<全体会>

持続可能な全事研活動について

報告者 全国公立小中学校事務職員研究会
副会長 山本 将司 氏



参加者の感想

◎ これまであまり全事研の活動について興味を持ってきませんでした。説明を伺い意識が変わりました。全事研が発信する情報をキャッチし、全国的な流れ・課題を理解しないと、目の前の業務や抱える困難の解決のために自分がやるべきことというのはわからないと感じました。

◎ 全事研の目的や活動内容が詳しくわかる報告でした。また、事務職員のリーフレットを確認してみたいと思いました。

◎ 全事研の活動を分かりやすく説明いただきありがたかったです。評議員会の直前でもあるため、評議員の方々は次につながるかと思います。本部部局の再編などのこの先の予定を少しでも触れられて、その情報を得たことは大きなことであると思いました。



◎ 全事研という組織は、会員にとって遠く感じる存在です。ですから、今回のような説明・報告をしていただけるのは、会員としての意識向上につながる大切な機会だと思います。

◎ 具体的にどのような活動をしているのか分かって良かったです。HPを積極的に見てみようと思います。

◎ 全国の動きと県の動きが調和するようになるとうれしいですが、難しさを感じました。島根県として今後考えていくにあたり、県外研究大会・全事研大会などに積極的に参加して情報を求める姿勢が必要なことを改めて感じました。また、現状のままではどこまでいっても事務職員どまりのように感じます。共同学校事務室の設置、権限の委譲など一部の取組ではなく全国一斉に実施できるように働きかけをしてもらいたいです。

◎ 今後は、学校事務職員としてできる子どもへの支援を考えていきたいと感じました。

◎ 最近は、発信されている情報を自分で取りにいかないといけないような感覚でしたが、こうして丁寧にお話していただくと、よくわかり、より身近に感じられました。

<講演>

演題「学校事務職員は片づけの発信者」

講師 収育士・学校片づけアドバイザー 伊藤 寛子 氏



◎ 印象に残ったワードは、「忙しいから片づける!」「人を責めるな。仕組みを責めよ!」「学校を俯瞰できるのは学校事務!」などで、何かやってみたい、という気持ちになりました。

◎ 先月の地震の際に危険性を感じたばかりなので、まずは「棚の上に棚はあらず」を職員に広めたいと思いました。

◎ 最後に言われていましたが、「全員で取り組む」これこそが大切であると思います。事務職員は一人配置であることが多いからこそ、独りよがりになることもあり、また、教員とはそもそもの視点も違い、事務職員の意識で良いと思うものも、教員は「そこではない」と思うものもあるかもしれません。課題を洗い出し、課題解決に向けて全員で取り組む、そして、改善の達成感を全員で味わうことはとても素敵なことと思いました。

◎ 伊藤氏の書籍を熟読して、職員室の消耗品や印刷室の消耗品の整理を実践しています。片づけの手順(出す、分ける、しまう)や虹色並べ、書くものなどの仲間でもとめるゾーニングなどを取り入れて、教職員や子どもたちに高評価をいただいています。今回の講演を聴いて、あらためて今までの実践を振り返り、できたことやできなかったことを整理して、さらなる実践を重ねていきたいと思っています。

◎ 消耗品を置いている棚についているガラス戸を外したいと思いながら長らく過ごしていましたが、ついに外す決心がつかしました。

◎ 時間がないから、今でも十分片づいてるからと手をつけていなかったことに対して、忙しいからこそ片づけるという言葉聞いて、ハッとしました。子ども達のために、片づけます!

参加者の感想

お片づけアドバイザーのモニター校として実際に取組に関わった

川本町立川本小学校 主事 永井菜摘さんからのコメント



伊藤さんからは、主に職員室の事務用品の収納についてアドバイスをいただき、改善を進める中で、「整理整頓の見え方」や「使いやすさ」が大きく変わることを実感しました。特に、棚のサイズや使用頻度、動線を踏まえた無理のない提案をしていただけた点が印象に残っています。収納用品の種類や個数、組み合わせ方まで具体的にアドバイスをいただき、とても分かりやすかったです。また、用途に応じて色分けしたラベリングを取り入れることで、一目で分かる収納となり、誰が使っても迷わない環境になったのではないかと感じています。職員からも「探しやすくなった」「元に戻しやすくなった」という声が聞かれるようになりました。普段、お片づけアドバイザーの方から直接指導していただく機会はなかなかないため、今回の取組はとても貴重で、多くの学びがありました。配置や分類を見直したことで、「ただ片づいている」だけではなく、「使いやすく、同じ状態を保ちやすい」環境に改善できたと感じています。今回の取組を通して、専門家の視点を取り入れることで、日常の小さな困りごとが減っていくことを実感しました。また、学校事務職員として、環境を整えることが日々の仕事を支える大切な役割であると、改めて感じる機会にもなりました。

学校紹介

大田市立五十猛小学校

森川 真衣



大田市立五十猛小学校は、海と山に囲まれた自然豊かな地域に位置する、全校児童51名の学校です。

本校の特色ある行事の一つに、地域行事である「グロ」の学習があります。「グロ」は五十猛地区に伝わる伝統的な行事で、毎年1月11日～15日の間、漁師の方が中心となり海岸に仮屋（グロ）を建てます。グロの囲炉裏の火で餅やスルメを焼いて食べると今年1年健康に過ごせるといふ言われがあり、本校の児童も毎年参加しています。今年も地域の方と囲炉裏を囲み、子どもたちは煙で涙を流しながらも、マシュマロやウィンナーなどを焼いてグロを楽しんでいました。本校の参加にあわせてグロの歴史等を学ぶ講演会も開催され、地域と学校が連携して大切にされている行事です。

本校は、今年度末に静間小学校、鳥井小学校とともに3校が統合し、新たに静間小学校としてスタートします。子どもたちは来年度に向け、3校による交流学习やバス登校の練習を行っています。事務職員としては、統合に向けて移動する備品の計画や文書整理を進めているところです。統合後も五十猛の「グロ」はふるさと学習の一つとして受け継がれ、3校それぞれの地域の歴史やふるさと学習を、次につないでいく大切さを感じています。

残り少ない時間となりましたが、子どもたちが五十猛小学校での経験を胸に、新しい学校で安心してスタートを切れるよう、事務職員として支えていきたいと思ひます。



【五十猛地区の地域行事『グロ』の様子】

ほじとけん 161.20



原作・画：佐伯 圭一

【編集後記】

1月の島事研セミナーに参加し、片づけ意欲がふつつつ湧いてきました。困り感があり、落ち着いたらやろうと後回しにしてきた分野でしたが、「忙しいからこそ片づける」という言葉や、片づけの効果の大きさに驚き、これはやらねばという思いになりました。学校に戻り、第一歩として事務用品棚のガラス戸を外したところです。これから周りを巻き込みながら片づけの仕組みづくり、環境整備に取り組んでいきたいと思ひます。

今年度も爽の発行や情報部の取組に対し、たくさんのご協力をいただきありがとうございます。た。 (Y.S)